

# 初期英語における文法上の新しい仕掛け

— 古ノルド語からの「贈り物」—\*

松 瀬 憲 司

## Grammatical Gimmicks in Early English: *Gifts* from Old Norse

Kenji MATSUSE

(Received September 3, 2001)

At the very early stage of the English language, its grammatical system was greatly influenced by the various elements from Old Norse which was the language of the Vikings due to the existence of the Danelaw district where many Danes lived side by side with Anglo-Saxons. The present paper discusses the newly obtained grammatical machinery to English through the contact with Old Norse: (1) sibilant factor (i.e., “-s”) seen in the inflectional endings of genitive-singular and nominative-plural cases and (2) several morphologies of third-person pronouns (both singular and plural). In addition to these, it should be emphasized that at the Old English (or Anglo-Saxon) period both syncretism of some inflectional endings and simplification of grammatical genders had already begun, which means foreshadowing of the decay of the inflectional system and the grammatical gender of the English language.

**Key words** : Old Norse, inflectional endings, sibilant, pronoun, syncretism

### 1 はじめに

現代英語 (Present-Day English, 以下 PDE と略記する) には「二重語 (doublets)」なるものがある。大塚・中島 (1982) の定義によれば、「同一語源に遡る, 形態・意味の異なる一組の語」ということになる。例えば, shirt と skirt というよく似た形態を持つ単語があるが, それぞれの意味は衣類の上半身部分と下半身部分を表すといった具合で全く逆になっている。そこで, これらの語源を調べてみると, 前者が古英語 (Old English: OE) の *scyrte* (発音は /jyrte/), 後者が古ノルド語 (Old Norse: ON) の *skyrta* に遡ることができ, さらに双方とも “short garment” を表すゲルマン祖語 (Proto-Germanic: PGmc) の \*skurtjon- にその源泉を求めることができる (Hughes, 2000: 99 参照)。<sup>1)</sup> このように元来 ON の *skyrta* も “shirt” の意味を持っていたのだが, OE に取り入れられた後 (理由は定かではないが<sup>2)</sup>), “the lower part of a women’s dress or gown, covering the person from the waist downwards” の意味として機能するようになる。OED (s.v. *skirt*) では, a1300 年に中英語 (Middle English: ME) で書かれた *Cursor Mundi* がその初出例を含むとされている。<sup>3)</sup>

英語史を振り返るとき, このような英語に対する ON の影響がいかに甚大であったかを我々はしばしば感じる。それは, 一面英語という個別言語への, ON からのまさに大きな「贈り物」であったとも言っている。ちなみに, OE の *gift* は単数形で, 特に “marriage gift by the bridegroom, dowry” の意を表し, 複数形で “nuptials, marriage, wedding” を表した。発音は /jift/ であった。これに対し, PDE の *gift* は「ニュートラルな」贈り物を表し, 発音も /gift/ である。<sup>4)</sup> 実は, 後者は ON からの借用形であり, 前者の本来語形に取って代わったのである (Baugh & Cable, 1994<sup>4</sup>: 95;

Freeborn, 1998<sup>2</sup>: 48). 驚くことに「贈り物」という言葉そのものでさえ借り物であるのだ。そして、さらに言えば、この ON の影響は単に開放語類語彙の借入レベルにとどまることなく、初期英語文法（ひいては現在の英文法）の核心部分にまで及んでいるのである。まさに、英語は ON から「文法上の新しい仕掛け」を贈ってもらったということになる。本稿では、その中でも特に形態論の分野に属する「屈折語尾」と「代名詞」に焦点をあてて ON との接触を論じていく。本稿の構成は次の通りである。前者については次節で取り上げ、後者については3節で議論する。そして4節で結果をまとめることにする。

## 2 名詞屈折語尾の改良 — 複数と属格 —

OE の名詞群は現代標準ドイツ語 (Modern Standard German: MSG) のそれと同じく様々な語形変化 (declension) の型を持っていた。大雑把に言えば、Quirk & Wrenn (1955/94: 20) が指摘するように、次の5つに分類できる (以下の (1) では、それぞれの型について、属格単数 [Gen(itive). S(in)g(ular).], 主格複数 [Nom(inative). Pl(ural).], 属格複数 [Gen. Pl.] の屈折語尾を示す)。

	Gen.Sg.	Nom.Pl.	Gen.Pl.
(1) a. General Masculine Declension:	-es	-as	-a
b. General Neuter Declension:	-es	-u/∅	-a
c. General Feminine Declension:	-e	-a	-a
d. The <i>-an</i> Declension:	-an	-an	-ena
e. Irregular Declension:	-a/-es/-e/∅	-a/-ru/∅	-a/-ra

言うまでもなく、この中で PDE まで継承されているのは、不規則変化を除けば、最終的に「所有格 (possessive)」単数の *-s* (アポストロフィ・エス) に転換していく属格単数の *-es* と、当該の母音が曖昧音化した「共通格 (common case) *-(e)s* に姿を変える主格複数の *-as* だけである (Bradley & Potter, 1968/70: 29)。このように、上記5つの型の中で唯一 (1a) の型が生き残った背景には、他の型には見られない形態上の明晰さがあったからに他ならない。

ここで、屈折語尾の「合一 (syncretism)」と「水平化 (leveling)」について言及しなくてはならない。例えば、上記 (1a) と (1d) の型は PGmc では次のようになっていた (Voyles, 1992: 228 & 234)。

(2)	“day”	OE:	PGmc:	OE:	PGmc:	
	Nom.Sg.	dæg	*dag-az <sup>5)</sup>	Nom.Pl.	dag-as	*dag-os/-oz
	Gen.	dæg-es	*dag-ez	Gen.	dag-a	*dag-ō
	Dat(ive).	dæg-e	*dag-e	Dat.	dag-um	*dag-amz
	Acc(usative).	dæg	*dag-a	Acc.	dag-as	*dag-ā
(3)	“man”	OE:	PGmc:	OE:	PGmc:	
	Nom.Sg.	gum-a	*gum-o	Nom.Pl.	gum-an	*gum-anz
	Gen.	gum-an	*gum-inz/-anz	Gen.	gum-ena	*gum-anō
	Dat.	gum-an	*gum-in/-an	Dat.	gum-un	*gum-anumz/-numz
	Acc.	gum-an	*gum-anu	Acc.	gum-an	*gum-anū

一見して明らかなように、PGmc ではそれぞれの格が独自の屈折語尾形態を持っていたのだが、OE の段階では、いくつかの格においてそれらが融合してしまっている。それは (2) のような単なる主格と対格での合一に留まらず、<sup>6)</sup> 属格や与格までも巻き込んだ (3) のような型まで生み出してしまった。その結果、(3) では、合計 8 つの格のうち 5 つまでもが同一の語尾を持つという事態が生じており、これでは、ほとんど屈折語尾の機能を果たし得ないことになる。また、(1c) の女性名詞の場合、単数で 3 つが同語尾、複数でまた別の 3 つが同語尾という事態が起こった。<sup>7)</sup> ちなみに、Fischer *et al.* (2000: 38) によれば、OE 動詞の屈折変化 (conjugation) に関しては、多少の合一は見られるものの、システム全体としては何とか機能を保ち得たと言えるらしい。

ただ、逆にこのことは視点を変えてみれば、ON との接触以前から、一部の名詞は OE の段階で既に語尾の水平化へ向けて動き出していたとも言えるわけで、英語における屈折語尾体系の消失はある意味必然的だったと言っていいかもしれない (Mitchell, 1994: 164 は、SVO 語順への移行と前置詞の頻用が既に OE 期に始まりつつあったこともその一因として捉えている)。まず、一部名詞における屈折語尾の融合・合一のために判別機能が著しく低下する。そうする内に別の名詞群の特定語尾 (この場合 -es と -as) が有用 (有力) に感じられるようになり、次第にその勢力が全名詞にまで波及していくという水平化に繋がっていくのである。そしてその水平化への基礎工事を拡大したとも言えるものが他にもない ON との接触なのである。

Bradley & Potter (*ibid.*: 31) には、10 世紀の『リンディスファーン福音書』(ラテン語) への OE による行間語句注釈の例が示されているが、これは、これまで本稿で OE の例として使用してきた南西部の「ウエスト・サクソン方言 (West Saxon: WS)」ではなく、北部方言である「ノーサンブリア方言 (Northumbrian: Nor.)」で書かれている。<sup>8)</sup> では、以下に具体的に 2 つの方言を比べてみよう。

(4)	“covetousness”	Nom.Sg.	Gen.Sg.	Nom.Pl.	
a.	WS	gitsung	gitsung-e	gitsung-a	= (1c)
b.	Nor.	gitsung	gitsung-es	gitsung-as	
(5)	“heart”	Nom.Sg.	Gen.Sg.	Nom.Pl.	
a.	WS	heort-e	heort-an	heort-an	= (1d) Feminine
b.	Nor.	heart-a	heart-es	heart-o	
(6)	“star”	Nom.Sg.	Gen.Sg.	Nom.Pl.	
a.	WS	steorr-a	steorr-an	steorr-an	= (1d) Masculine
b.	Nor.	stearr-a	stearr-es	stearr-as	

(4a) は WS の典型的な女性名詞の型だが、Nor. の (4b) では、ここに (1a) の男性名詞の型を援用することで、屈折語尾の合一による格の曖昧性を排除している、<sup>9)</sup> また、(5a) と (6a) は (1d) で示される「弱変化」型であるが、((5b) の複数主格形では -o という語尾が現れてはいるものの) ここでも (1a) の型を取り入れることによって形態的明晰性を高めている。Bradley & Potter (*ibid.*: 32) によれば、この拡散現象は 10 世紀に始まり、その後約 3 世紀をかけて全名詞へと浸透していったらしい。問題は、ではなぜそのような革新が北部方言でのみ起こったのかということであろう。本稿では、次の 2 点を強調したいと思う。

まず、第1に、8世紀終盤に始まるヴァイキングたちのイングランド侵攻の結果、イングランドの北部及び東部には大量の北ゲルマン語系諸民族が入植したことで、彼らの言語である ON が持ち込まれたことを挙げねばならない。ウェセックス王アルフレッドによって定められた、いわゆるデーンロー地域内では、アングロサクソン人とデーン人が共生する事態が生じ、ここでは結果的に民族融合が進行していく。その際彼らによって採択された言語は OE であって、ON ではなかった。さらに正確に言えば、それは「アングロ・ノルド語」というより「ノルディック英語」とでも言うべきものであったろう（松瀬、2000a: 46-48 参照）。

Bradley & Potter (*ibid.*: 25-26) は、Yorkshire の Aldborough で見つかった、デーン人の手によると思われる以下の (7a) ような興味深い OE 碑文の例を挙げているが、書き言葉でさえもこのように OE と ON の混淆文が現れるとすれば、話し言葉での混淆の状況は想像に難くない。ただし、あくまでも主体は OE である点がクルーシャルなのである。

- (7) a. Ulf let aræran cyrice for *hanum* and for Gunware saula.  
 b. Ulf caused a church to be built for *himself* and for the soul of Gunwaru.

上記のような閉鎖語類レベルでの（ある意味当然の）類似だけでなく、OE と ON の両者は元々同じゲルマン語同士であったので、基本語彙の語幹部分は非常に似通っており、異なる部分は屈折語尾の部分だけであった。そうである場合、当初彼らの間でコミュニケーションをする際、それらの屈折語尾は全く無視されるか、極度に単純化されて使われるかのいずれかであったろう。ゲルマン語のような総合的言語がいきなり（例えば、中国語のような）分析的言語に鞍替えすることは考え難いので、おそらく後者の状況が成立していたと考えていい（Jespersen 流に言えば、“many *nuances* of grammar should be sacrificed, the intelligibility of either tongue coming to depend mainly on its mere vocabulary” [1894: 173] ということになる）。

例えば、ここで試みに OE の *dæg* と ON の *dagr* を比較してみると（Gordon & Taylor, 1957: 283-284）,

(8)	“day”	OE:	ON:	OE:	ON:	
	Nom.Sg.	<i>dæg</i>	<i>dag-r</i>	Nom.Pl.	<i>dag-as</i>	<i>dag-ar</i>
	Gen.	<i>dæg-es</i>	<i>dag</i>	Gen.	<i>dag-a</i>	<i>dag-a</i>
	Dat.	<i>dæg-e</i>	<i>deg-i</i>	Dat.	<i>dag-um</i>	<i>dog-um</i>
	Acc.	<i>dæg</i>	<i>dag-s</i>	Acc.	<i>dag-as</i>	<i>dag-a</i>

上記 (8) から十分想像可能なように、ある時期、与格単数形が *\*dege* /*deje*/ と発音されたり、複数の属格・与格・対格がすべて *\*daga* になっていた状況も考えられないことはない。デーンロー地域では、このような屈折語尾の単純化が (1b) ~ (1d) の各名詞群で促進され、格を明示する機能が以前よりも数段低下した時に、新たな文法装置として登場したのが、他の屈折語尾に比して極めて弁別性の高い強力な s 音 (sibilant) を併せ持つ属格単数の *-es* と主格複数の *-as* ではなかっただろうか。

そして第2に、西ゲルマン語系民族の侵略者たちによって、ブリタンニアのイングランド地域に新たに植え付けられた低地ドイツ語系言語が OE として生育していく過程で、最終的には4つの方言を形成していくことになるのだが、<sup>10)</sup> それぞれの方言にはそのベースとなる移民の言語が

あり、ノーサンブリア方言とマーシア方言のそれは、これらを一纏めにして「アングリア方言」と呼ばれることからわかるように、「アングル人 (Angles)」の言語であるということである。これは、「(ウェスト・)サクソン人」の言語であるサクソン語とは、元来多少異なるものであったと考えられ、5～6世紀にイングランド入植後、約300年間にわたる地域分化が南西部の方言との差異拡大に拍車をかけた可能性は高い。前出の二重語の *gift* の例における硬音 /g/ を持つ語の採用などは、単なる ON からの借用にすぎないと考えられがちだが、実はその受け入れの素地として、アングリア方言そのものにむしろ硬音保持を好む傾向があったのではないかと Baugh & Cable (*ibid.*: 95, n.1) は主張している。<sup>11)</sup> だとすれば、そもそも北(・東)部方言はウェスト・サクソン方言とは一線を画する物であっただけでなく、ON との接触により、「さらなる」変容を遂げたと思像される。その一例として、ノールズ (1999: 40) はノーサンブリア方言における不定詞語尾の -a (ウェスト・サクソン系の -an ではない) を指摘しており、これは ON 系の不定詞語尾と同型なのである。この最後尾の -n の消失は、果たして、大陸でのアングル語時代の接触時に既に始まっていたのか、それともイングランドに入植後の「再接触」時に始まったのかは定かではないが、名詞の屈折語尾としての -an (すなわち (1d) の弱変化型) においてもまた、同様の音韻変化が起こったとしてもあながち不思議なことではなからう。であるならば、北部方言における屈折語尾の曖昧化はいよいよ進行し、弁別機能を極度に低下させていったと考えられる。そしてそれを補うために、男性強変化名詞の型である (1a) が名詞全般に敷衍されるようになったことは、ある意味必然的な流れだったのかも知れない。

最終的に、英語の標準形はこのアングリア方言(デンロー・マーシア方言)を基礎に構築されることになり、純粹サクソン語系のウェスト・サクソン方言の直系足り得なかったということ、大都市ロンドンにイースト・ミッドランドからのアングリア方言系移民が大挙押し寄せたという地理的条件がそこに大きく影響していることもさることながら (Kristensson, 2001b: 72)、その屈折体系を大幅に消失しつつあったこの言語にとって、言語としての明晰性を保持するという心理的な意味において、言語接触によっていち早くその装置を手に入れていた北東部方言が手本とされたのは至極当然の成り行きだったと言っていい。

### 3 3人称代名詞の改良 — 単数女性形と複数 —

PDE では、文法的性 (grammatical gender) は「ほとんど」消失し、名詞はおもに自然性に対応するようになってしまっている。だが、代名詞だけは自然性に対応するというパラダイム変換後も、単数形に置いては三性による区別を持ち続けた。

OE の3人称代名詞は以下の (9) に示すような形態をとっていた (Bradley & Potter, *ibid.*: 44; Quirk & Wrenn, *ibid.*: 38)。なお、比較のために角括弧内に MSG の古形である古高ドイツ語 (Old High German: OHG) の3人称代名詞も併記しよう (高橋, 1994: 58)。

(9)	Sg. Masc(uline).	Neut(er).	Fem(inine).	Pl. Com(mon).	[M/N/F]
Nom.	he [(h)er]	hit [iʒ]	heo, hi(e) [si(u)]	hi(e)	[sie/siu/sio, sie]
Gen.	his [sin]	his [es, sin]	hi(e)re [ira]	he(o)ra	[iro/iro/iro]
Dat.	him [imo]	him [imo]	hi(e)re [iru-o]	him/heom	[in/in/in]
Acc.	hine [inan]	hit [iʒ]	hi(e) [sia]	hi(e)	[sie/siu/sio, sie]

しかし、一般的に、OE とは「(ウェスト・)サクソン語」のことであることを考えるとき、OHG ではなく、大陸の「古サクソン語 (Old Saxon: OS)」と OE とを比較すると、その類似性がよく理解できる。なお、OS の複数における Nom. と Acc. に関しては、Masc. と Fem. が *sia, sea, sie* の三種類を持ち、Neut. が *siu* である。また、Gen. と Dat. に関しては、OE と同じく三性に共通である。

(10)	Sg. Masc.	Neut.	Fem.	Pl. Com.	[M, N/F]
Nom.	he [he/hi/hie]	hit [it]	heo/hi(e) [siu]	hi(e)	[sia, sea, sie, siu]
Gen.	his [is]	his [es]	hi(e)re [iro/-u/-a]	he(o)ra	[iro/-a]
Dat.	him [im(u/-o)]	him [im(u)]	hi(e)re [iru/-o]	him/heom	[im]
Acc.	hine [ina/-e]	hit [it]	hi(e) [sia/sea/sie]	hi(e)	[sia, sea, sie, siu]

また、ON のそれは以下のようにであった (Gordon & Taylor, *ibid.*: 294)。ちなみに、現代デンマーク語 (Modern Danish: MDan.) での 3 人称代名詞では、PDE と同じく、Dat. と Acc. は Obj. に一本化されており、複数も三性に共通になっている (岡田他, 1984: 75)。

(11)	Sg. Masc.	Neut.	Fem.	Pl. M/N/F	[Com.]
Nom.	hann [han]	þat [det]	hon [hun]	þeir/þau/þær	[de]
Gen.	hans [hans]	þess [dets]	hennar [hendes]	þeir(r)a	[deres]
Dat.	honum [ham]	þ(v)í [det]	henni [hende]	þeim	[dem]
Acc.	hann [ham]	þat [det]	hana [hende]	þá/þau/þær	[dem]

これらに対し、PDE では、以下のようなパラダイムになっている (角括弧内は MSG の 3 人称代名詞である。なお、MSG では、いわゆる Gen. は所有・帰属を表すのには用いられず、その役割は -er 語尾を持たない「所有代名詞」が果たす)。

(12)	Sg. Masc.	Neut.	Fem.	Pl. Com.
Subj(ective).	he [er]	it [es]	she [sie]	they [sie]
Poss(essive).	his [sein(er)]	its [sein(er)]	her [ihr(er)]	their [ihr(er)]
Indirect Obj(ective).	him [ihm]	it [ihm]	her [ihr]	them [ihnen]
Direct Obj.	him [ihn]	it [es]	her [sie]	them [sie]

以上の (9) ~ (12) をさらに立体的に比較したものが次の (13) である。上記の各言語がそれぞれの項目に当てはまるならば「+」、当てはまらないならば「-」で示している。ただし、一部当てはまる場合もあるので、その時には「+ \*」で表すことにする。

(13)	OE	OHG	OS	ON	PDE	MSG	MDan.
a. Sg. Masc. は全て異形	+	+	+	-	-	+	-
b. Sg. Neut. の Nom. (Subj.) と Acc. (DObj.) は同形 <sup>12)</sup>	+	+	+	+	+	+	+
c. Sg. Masc. の Gen. (Poss.) と Sg. Neut. の Gen. は同形	+	+*	-	-	-	+	-
d. Sg. Masc. の Dat. (IObj.) と Sg. Neut. の Dat. は同形	+	+	+*	-	-	+	-
e. Sg. Fem. の Nom. と Acc. は同形	+*	-	-	-	-	+	-
f. Sg. Fem. の Nom. は一部 Nom./Acc. Pl. と同形	+	+	+	-	-	+	-
g. Sg. Fem. の Gen. と Dat. は同形	+	-	+*	-	+	-	-
h. Pl. は三性に共通	+	-	-	-	+	+	+
i. Nom. Pl. と Acc. Pl. は同形	+	+	+	-	-	+	-

まず、上記 (13) から、それぞれの言語の古形 (波線より左) と近代形 (波線より右) を比較すると面白いことが分かる。それは、MSG や MDan. が持つ特性は、その古形である OHG や ON のそれと大差ないが (それぞれ 2 項目と 1 項目の変化のみ)、PDE と OE では、その間に非常に大きな隔たりがあるということである (6 項目に渡って変化)。このことは、MSG や MDan. の保守性を示していると同時に、<sup>13)</sup> 英語の場合、OE 以降に大きな代名詞体系の改変があったことを意味している。その中でも、本節では特に、「女性形 (Fem.)」と「複数形 (Pl.)」に注目していこうと思う。

(13e) ~ (13g) から検討を始める。OE には、3 種類の Nom. Sg. Fem. 代名詞が認められており、それぞれ、*heo*, *hi*, *hie* であった (ちなみに、PDE では、*she* の他に方言形として、ランカシャーやチェシャーあたりの *oo* やスタッフォードシャー・シュロップシャー・グロスターシャーなどの *er* が認められている [Upton & Widdowson, 1996: 69]).<sup>14)</sup> この中で *hi* と *hie* は Acc. Sg. の機能も持ち合わせていたが、奇妙なことに OE を除く古形にはこの特徴が見られず、むしろ、(古形の OHG では見られなかったにもかかわらず) 近代形の MSG に現れている。そして OE の近代形であるはずの PDE には、この特質は発見されない。ただ、前出の方言形 *er* は明らかに *her* の「語頭音消失 (aphaeresis)」形であることから、この方言では Nom. と Acc. が同一であるとも言えよう。逆に、Trudgill (1999<sup>2</sup>: 95-96) によれば、PDE の南西部方言の特徴として「代名詞交代 (pronoun exchange)」という現象もあるらしい。

- (14) a. John saw *they*.  
b. Bill gave it to *she*.

また、(13f) より、Nom. Sg. (一部 Acc. も含む) と Nom. Pl. 及び Acc. Pl. が同形であるのは、(13e) のときとは違って、ON を除く全ての古形に見られ、近代形ではやはり MSG にのみ見られる特質である (MSG などは、Gen. Sg. と Gen. Pl. も同形である。もっと言うと、3 人称 Pl. は「敬称」2 人称としても使用されるので、指示の領域がさらに拡大する)。

後者のような代名詞 Nom. における「単複合一」とも言える現象は、名詞の「単複同形」と異なり、限定詞を伴うことができない分、同じ Sg. 内での格弁別以上に、弁別上一般に非常な不都合を招く可能性が高いと考えられるが、<sup>15)</sup> MSG ではこれが OHG の頃より踏襲されてきている。おそらく、屈折組織を十分に保持している MSG のような言語ではこのことはそんなに大きな障害足り得ないのだろう。ただ、最終的にこの単複合一を放棄した PDE でさえも、わずかに動詞の 3 人称 Sg. 現在形の屈折語尾だけは残存させているのは、OE 期に存在した 3 人称代名詞体系の不備を補う装置の名残であると言えるのではないだろうか。さらには、この曖昧さは、Sg. Fem. の hi(e) /hi:(e)/ だけでなく、音声的に類似した、同じ /h/ 音で始まる Nom. Sg. Masc. の he /he:/ をも巻き込む可能性は大いにあったので、なおさら動詞レベルでの弁別が必要だったと思われる。また、Sg. Fem. が heo /he:o/ (後に /hjo:/ に変化する。前述のランカシャーやチェシャーの PDE 方言形である oo は、この /hjo:/ の語頭音消失の結果できあがった) である場合も音声的類似は完全には払拭できない。

おそらくはこういう状況の中で、Nom. Sg. Fem. の she は登場するに至ったのであろう。伝統的にこの she は OE の指示代名詞 Nom. Sg. Fem. の seo (/se:o/ と発音されたが、後に /sjo:/ > /jo:/ に変化した) に由来すると言われてきた。<sup>16)</sup> Quirk & Wrenn (*ibid.*: 39) によれば、OE の指示代名詞 (PDE の that に相当) は以下の (15) のような体系を持っていた。

(15)	Sg. Masc.	Neut.	Fem.	Pl. Com.
Nom.	se	þæt	seo	þa
Gen.	þæs	þæs	þære	þara
Dat.	þæm	þæm	þære	þæm
Acc.	þone	þæt	þa	þa

だが、OE では、その後期の段階で Nom. Sg. Masc. の se と Nom. Sg. Fem. の seo がそれぞれ þe と þeo に変化したので (*OED*, s. v. *the* 参照)、指示代名詞全般にわたって th 音で統一されることになり、最終的に PDE の定冠詞 the を生み出すに至ったのである。ここでその役目を終えた seo が、単複合一の曖昧さのために機能不全に陥っていた Nom. Sg. Fem. の代名詞 heo, hi, hie に代わって利用できるという「渡りに船」の状況ができあがった。「補充 (suppletion)」の一種と言っている。

ME での方言分布 (Mossé, 1957: 57) を見ると、この she の系列はおもに「デーンロー地域」に現れており、この地域では seo による置換がスムーズに行われたと考えられる。それはやはり OE と ON との言語接触がこの置換を促進したからであろう。以下の (16) に示すのは、Gordon & Taylor (*ibid.*: 295) による ON の指示代名詞 that の体系である。

(16)	Sg. Masc.	Neut.	Fem.	Pl. Masc. /Neut. /Fem.
Nom.	sá	þat	sú	þeir/ þau/ þær
Gen.	þere	þess	þeir(r)ar	þeir(r) a/ þeir(r) a/ þeir(r) a
Dat.	þeim	þ(v)í	þeir(r)i	þeim/ þeim/ þeim
Acc.	þann	þat	þá	þá/ þau/ þær

一見して、両者は非常によく似た体系であることが分かる (唯一 Dat. Sg. Neut. が大きく異なるく



らいである [OE þæm vs. ON þ(v)í]. また、ON の指示代名詞 3 人称 Pl. は、実は人称代名詞のそれとまったく同じであるために ((11) 参照)、次に述べる代名詞 Pl. 形をデーロー地域において採用する際に、(指示) 代名詞としての Pl. 形と連動する形で、指示代名詞の 3 人称 Nom. Fem. をも取り入れやすい状況が出来たとも考えられる。その中で、指示代名詞自体は Neut. の *that* に収斂していくのは、文法的性が消失していったことだけでなく、OE・ON とともに (ほとんど) 同形であったことが大きく作用していることは疑う余地がない。

ただ、一つ奇妙なのは、(13g) の Gen. と Dat. における同形がそのまま PDE まで継承されている点である。これは、OE 以外では OS にのみ見られる特徴であり、OHG や ON は異形を採用している。であれば、接触相手である ON が持っているこの利点がなぜ OE に取り入れられなかったのかは一つの謎であるが、Gen. と Dat. の場合、Nom. と Acc. の場合と異なり、生起する環境が大きく違うので、この両者の格判別にはそれほど大きな曖昧性が付いて回らないことが原因だったのかも知れない。

さて、次に (13h) や (13i) に見られる Pl. 形のことである。まず、古形と近代形を比較したとき、OE をのぞくすべての古形では、文法的性による形態の区別を保持しているが、その近代形ではことごとくその区別を消失している。この点では、英語のみがその古形から Pl. における三性に共通の形態を維持したのである。屈折体系を大いに保存している MSG でさえ、Pl. においては三性に共通形態化したことを考えれば、英語は OE の段階で既に文法的性の簡略化を始めていたと言えるだろう。

(13i) では、ON を除く古形で Nom. と Acc. が同形であることが分かるが、このことは近代形では、MSG で継承されているに過ぎない。だが、英語の場合、ON との接触の結果、異形を採用するに至った (ひとつには、Dat. と Acc. が Obj. に合流したことが異形化をおこしたことに繋がっている)。 (11) や (12) から分かるように、PDE の *they-their-them* は、明らかに ON の Pl. Masc. 形である *þeir-þeir(r)a-þeim* に由来すると考えられるが (Kristensson, 2001b: 76 は、ロンドン方言に大きく影響を及ぼした Norfolk 方言が強力にスカンジナビア化されていたことが、これら代名詞の採用に絡むと見ている)、この Poss. と Obj. に関しては、OE の指示代名詞 Gen. と Dat. 形の *þara* と *þæm* の形態もその採用に絡んでいると思われる。だとすれば、ON からの一番の贈り物は Nom. の *they* ということになるだろう。それは、前述の単複合一を回避することが出来るだけでなく、なおかつ Nom. と Acc. (Obj.) を異形にすることが可能になったからである。14 世紀のチョーサーにおいて、Poss. と Obj. は依然としてそれぞれ OE 形の *her/hir* と *hem* が使用されているが、Nom. は *they* が現れているところを見ても、この 3 人称 Nom. Pl. 形における革新は英語にとって非常に有用であったことを示している。

#### 4 ま と め

ヴァイキングたちがもたらした古ノルド語は、英語の最初期の頃、開放類語彙だけでなく、直接間接にその文法に対して計り知れないほどの贈り物をしてくれた。「-s (アポストロフィ・エス)」、[-(e)s 複数]、「3 人称代名詞 (単数女性形と複数形)」などである。これらはどれも英語という言語の根幹をなす部分と言っている。

もちろん上述のように、どうも古英語最初期より、屈折体系・文法的性は既に (一部) 崩壊 (自壊) の兆しを見せていたことが分かるが、もとよりこのことをより一層促進した最大の要因は、古英語と古ノルド語との接触であったことに間違いはない。もし古ノルド語 (そしてその後

のフランス語もそうだが)との接触がなかったならば、英語におけるある程度の屈折体系及び文法的性の簡略化はあり得たかもしれないが(現代標準ドイツ語や現代フランス語に見られるように)、これほどまでに徹底した屈折言語の特性の「消失」はあり得なかったであろう。

英語は、その「特異な」個別言語史からもわかるように、他のヨーロッパ近代語が辿らなかった発達経路を歩んできた。だからこそ、後日「国際語・地球語」などという大層な冠を戴くことになるのだが、それは(言うまでもなく、大英帝国やアメリカ合衆国の政治的・軍事的背景が最大の要因ではあるにしても)本稿で考察したような、その最初期に文法の根幹部分を取り替えるといったことに代表される、ほとんど「無節操」と言ってもいいほどの(純粋サクソン主義者たちから猛反発を買うほどの)「柔軟性」が英語という言語にあったからに他ならない。そして、おそらくその柔軟性は、英語に一部遺伝子的に組み込まれていたのであろうが(低地ドイツ語の一派として大陸から分離・独立したことが大きく関わっているものと思われる)、英語がイングランドで度重なる他言語との接触を果たすうちに、次第に強化されていった気質でもあるだろう。その柔軟性を最初に大きな形で発揮したのが、古ノルド語との接触の時期だったのである。古ノルド語から貴重な贈り物をしてもらうことで、英語はその生存力を何十倍にも強化し得たのである。

## 註

\*本稿は熊本大学大学院教育学研究科2001年度開講科目である「英語学特論Ⅲ」での議論をベースにして、担当教官である筆者がまとめたものである。この場を借りて、受講者の有田勝弘氏と山本幹樹氏に感謝の意を表します。

- 1) \*skurtjon- は、“short”を表す \*skurto- から派生したとされる (OED, s. v. *shirt*).
- 2) 低地ドイツ語 (Low German: LG) の schört は、ある地域では、“women’s gown”の意で用いられることもあるので、低地ドイツ語系である英語における意味分化の素地が全くなかったわけではないようだ。
- 3) 正確に言えば、OEDで引用されている写本の British Museum MS. Cotton Vespasian A. III からの箇所(下例 i)) や Bodleian MS. Fairfax 14 という写本では skirt/skirte を発見できるが、Göttingen University Library MS. Theol. 107 (下例 ii)) や Trinity College Cambridge MS. R. 3. 8. などの写本では、その同じ箇所は syrte/shurte という具合に OE の形が採用されている。
  - i) Sco lift hir *skirt* wit-vten scurn,  
And bar-fote wode sco þat burn; (8963-8964)
  - ii) Scho left hir *syrte* widuten schorne,  
And barfot wald ouer þat borne, (8963-8964)
- 4) OEにおいても、「ニュートラルな」贈り物を表す言葉として、giefu という女性名詞があったが、これは PDE では廃語になっている。
- 5) 厳密に言えば、PGmc で ⟨g⟩ と標記されているのは、\*dagaz も \*gumo も軟口蓋閉鎖音ではなくて軟口蓋摩擦音である。また、OE の dæg は /dæj/ と発音された。
- 6) ラテン語において、第3・4・5変化名詞の複数形は、そのほとんどが主格と対格形が同一であることが想起されるかもしれない。
- 7) 屈折体系をよく保存している MSG においても、複数形は最低3つの格で同一の屈折形を使用していることから(複数与格形には必ず -n を付与する決まりがある)、屈折語尾の有用性に疑問が投げかけられるが、これは英語と違って、定冠詞の形態による弁別が今もなお可能なために混乱することが少ないものと考えられる。

- 8) 周知の如く、「OE」という術語の持つ厄介さは、それが「12世紀までの初期英語」という抽象物を指し示すと同時に、当時の政治的優勢から標準文語としてイングランド全土に流布していた「ウェスト・サクソン（方言というより）語」（その故に資料も豊富に残存する）をも指す点にあり、むしろ、その具体性から、OEと言え、往々にして後者のイメージで受け取られる点にある。それもそのはずで、Fisiak (2001: 22) は次のように述べている。

iii) Most of the OE manuscripts which have survived until today were copied (not composed) in the West Saxon standardised language between the end of tenth century and twelfth century. Some EWS manuscripts date from the late ninth century and early tenth century but even then the language shows some traces of incipient standardisation.

そしてまた、このOEとしての「ウェスト・サクソン語」はPDEの直接の祖先たり得なかったという皮肉も同時に忘れてはならないことであろう（松瀬，2000b: 248）。

- 9) だが、すべての(1c)型の女性名詞に、同時にこの現象が起こったわけではないようだ。

iv)	“might”	Nom.Sg.	Gen.Sg.	Nom.Pl.	
a. WS		miht	miht-e	miht-a	= (1c)
b. Nor.		mæht	mæht-es	mæht-o/-a	

上例では、複数主格形には-asではなく、-oという屈折語尾が現れている点が興味深い。

- 10) Kristensson (2001a: 63) では、このOE方言4分説を“incomplete and imprecise”とし、Smith (1956) が提唱する7分説を支持している。その7つとは、ノーサンブリア方言、マーシア方言、ミドル・アングリア方言、イースト・アングリア方言、イースト・サクソン方言、ウェスト・サクソン方言、サウス・サクソン方言、そしてケント方言である。  
[A.H. Smith, *English Place-name Elements*, Cambridge: Cambridge Univ. Press.]
- 11) アングル人の故郷はユトランド（ユラン）半島の付け根部分であるとするならば（Graddol *et al.*, 1996: 43 はオランダとベルギーの国境付近が故郷であるという説を採っているが）、彼らがイングランドに入植する以前に、スカンジナビア半島に居住していた北ゲルマン語系民族と接触があった可能性は大であり、この時点で既にONの要素を吸収していたのかも知れない。ということは、デン人ヴァイキングのイングランド侵攻は、北部方言（アングル語）とONの「再接触」を意味しており、前者の変容速度を一段と速めたと考えられる（松瀬，2000b: 245 参照）。
- 12) Beekes (1995: 191) や下宮 (1999: 86) にあるように、Neut. のNom. とAcc. が同形なのは、広く印欧語の特徴である。註6) 参照。
- 13) ただ、MSGはOHGと変わらぬほどの屈折体系を保持しているのに対して、MDan. はONのそれをほとんど消失している点は、両者間の大きな違いであると言っている。
- 14) Clark Hall & Meritt (1960<sup>4</sup>: s.v. *heo*) によれば、*heo*にもAcc. Sg. “her”とNom. Pl. “they”およびAcc. Pl. “them”の意味があったようである。だとすれば、(12e)のOEのコラムは「+\*」ではなく、「+」に修正せねばならないが、Diamond (1970: 23) やLass (1994: 141) などでも*heo*はNom. Sg. Fem. のみに記載されている場合が多いようなので、この稿では、「+\*」のまま議論を進める。
- 15) OEでは、Dat. Sg. Masc. とDat. Pl. が同形の*him*になる可能性があったが、目的格の場合、もとより問題はない。げんにPDEでは、*him*と*them*という具合にきっちり区別しているにもかかわらず、口語では、それぞれ'imと'emに音声的に減じられ、ともに/əm/になってしまうので弁別不可能になるのだが、前後の状況からSg. かPl. かは判断できるのである。
- 16) Bennett & Smithers (1968<sup>2</sup>: xxxvii-xxxviii) は、この説を採っておらず、*was hjo* (< *heo*) [発音は /was hjo:/] のような連鎖から直前のs音と語頭のh音が融合し、/j/を生み出したとしている。しかし、これは、平叙文ではなく、疑問文や倒置文というある意味特殊な環境で起こる現象なので、これのみをもって（デンロー地域の）*sho*ができたとするのは、多少強引ではないかと考える。  
また、*hje* (< *hie*) [発音は /cje:/] では、その無声硬口蓋摩擦音 /ç/ が無声硬口蓋歯茎摩擦音の /j/ に置き換わったのは至極当然の音声的变化であるとしているが、この場合もこの現象を単独に捉えるよりは、指示代名詞単数女性形 *seo* の変種形である *sio* (後に /sje:/ と発音される) との「並行的」変化説

の方が説得力があるように思える。

### 参考文献

- Baugh, Albert C. & Thomas Cable. 1994. *A History of the English Language*. 4th edition. London: Routledge.
- Beekes, Robert S.P. 1995. *Comparative Indo-European Linguistics: An Introduction*. Amsterdam: John Benjamin's.
- Bennett, J.A.W. & G.V. Smithers. eds. 1968. *Early Middle English Verse and Prose*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.
- Bradley, Henry & Simeon Potter. 1968. *The Making of English*. Revised edition. London: Macmillan. (Repr., with notes by Takanobu Otsuka, Tokyo: Seibido, 1970.)
- Clark Hall, J.R. & Herbert D. Meritt. 1960. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. 4th edition. Toronto: University of Toronto Press.
- Diamond, Robert E. 1970. *Old English: Grammar and Reader*. Detroit: Wayne State Univ. Press.
- Fischer, Olga et al. 2000. *The Syntax of Early English*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Fisiak, Jacek & Peter Trudgill. eds. 2001. *East Anglian English*. Cambridge: D. S. Brewer.
- Fisiak, Jacek. 2001. "Old East Anglian: a problem on Old English dialectology."  
In Fisiak & Trudgill, eds., 13-38.
- Freeborn, Dennis. 1998. *From Old English to Standard English*. 2nd edition. London: Macmillan.
- Godden, Malcolm, Douglas Grey, & Terry Hoad. eds. 1994. *From Anglo-Saxon to Early Middle English: Studies Presented to E.G. Stanley*. Oxford: Clarendon Press.
- Gordon, E. V. & A. R. Taylor. 1957. *An Introduction to Old Norse*. 2nd and revised edition. Oxford: Clarendon Press.
- Graddol, David, Dick Leith, & Joan Swann. 1996. *English: History, Diversity, and Change*. London: Routledge.
- Hughes, Geoffrey. 2000. *A History of English Words*. London: Blackwell.
- Jespersen, Otto. 1894. *Progress in Language*. London: Swan Sonnenschein. (Repr., together with an introduction by James D. McCawley. *Amsterdam Classics in Linguistics*, 17. Amsterdam: John Benjamin's, 1993.)
- Knowles, Gerry. 1997. *A Cultural History of the English Language*. London: Arnold.  
(=ノールズ, ジェリー. 小野茂・小野恭子訳. 『文化史的に見た英語史』 東京: 開文社, 1999年.)
- Kristensson, Gillis. 2001a. "Language in contact: Old East Saxon and East Anglian."  
In Fisiak & Trudgill, eds., 63-70.
- Kristensson, Gillis. 2001b. "Sociolects in fourteenth-century London."  
In Fisiak & Trudgill, eds., 71-77.
- Lass, Roger. 1994. *Old English: A Historical Linguistic Companion*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 松瀬憲司. 2000a. 「言語接触と言語変容-- 古英語・古ノルド語間の接触について--」  
『熊本大学英語英文学』, 43, 41-55.
- 松瀬憲司. 2000b. 「R音転換再考」『熊本大学教育学部紀要』人文科学編, 49, 237-252.
- Mitchell, Bruce. 1994. "The Englishness of Old English." In Godden et al., eds., 163-181.
- Mossé, Fernand. 1952. Trans. J.A. Walker. *A Handbook of Middle English*. Baltimore: The Johns Hopkins Univ. Press.
- 岡田令子 他. 1984. 『現代デンマーク語入門』 東京: 大学書林.
- 大塚高信・中島文雄 監修. 1982. 『新英語学辞典』 東京: 研究社.
- Quirk, Randolph & C. L. Wrenn. 1955. *An Old English Grammar*. London: Methuen. (Repr. with a supplemental bibliography by Susan E. Deskis. DeKalb, Illinois: Northern Illinois Univ. Press, 1994.)
- 下宮忠雄. 1999. 『歴史比較言語学入門』 東京: 開拓社.
- 高橋輝和. 1994. 『古期ドイツ語文法』 東京: 大学書林.
- Trudgill, Peter. 1999. *The Dialects of England*. 2nd edition. London: Blackwell.
- Upton, Clive & J. D. A. Widdowson. 1996. *An Atlas of English Dialects*. Oxford: Oxford Univ. Press.

Voyles, Joseph B. 1992. *Early Germanic Grammar: Pre-, Proto-, and Post-Germanic Languages*.  
San Diego: Academic Press.